飢餓対策 NEWS　第 270 号　発行日 2012 年 12 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

フィリピン台風被災者緊急支援にご協力ください!!

当機構は、フィリピンを襲った超大型台風 24 号「ボーファ」の被災者への緊急支援（２頁に酒井駐在員の現地レポート）を開始しています。そのために皆様に緊急支援募金へのご協力をお願いいたします。台風が襲った時期は日本で衆議院選挙期間中と重なったため、この大災害がほとんど報道されず、支援の輪が広がっていません。現地では、犠牲者の多くが漁業関係者となっていますが、内陸部の被害の状況もさらに拡大するものと見られています。当機構は、現地駐在員の酒井スタッフと緊密に連絡を取りながら、現地のニーズに応える緊急支援を実施していきます。ぜひご支援ください。

募金は、郵便振替またウエブサイトからのクレジット決済でできます。支援の際は、「フィリピン台風」とご指定ください。

山津波が発生し、村が完全に流出した

海外で活動を目指す人のために ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング

参加者を募集しています！

海外での奉仕を希望している人が、世界の現状と私たちに出来ることを知る絶好の機会です。ぜひご参加ください！

期間：2013 年 3 月 18 日(月)～ 22 日(金)
会場：千葉県印西市内野
東京基督教大学（TCU）
費用：29,000 円
(テキスト代 5,000 円を含む)
定員：12 名
申し込み・お問い合わせ：大阪事務所
☎ 072-920-2227（松島）直通
☎ 072-920-2225（代表）
Email:general@jifh.org

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

□ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ チャイルド・サポーター（世界里親会）になりたいので説明書（申込書）を送ってください。
□ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 1,000 円）
□ JIFH（日本国際飢餓対策機構）サポーターとして協力します。
毎月（　　）口　（1口 500 円）
□ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
□ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女
〒
フリガナ
住所：
（電話）
▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーター 2493口。ぜひあなたのお知り合いにもお知らせください。

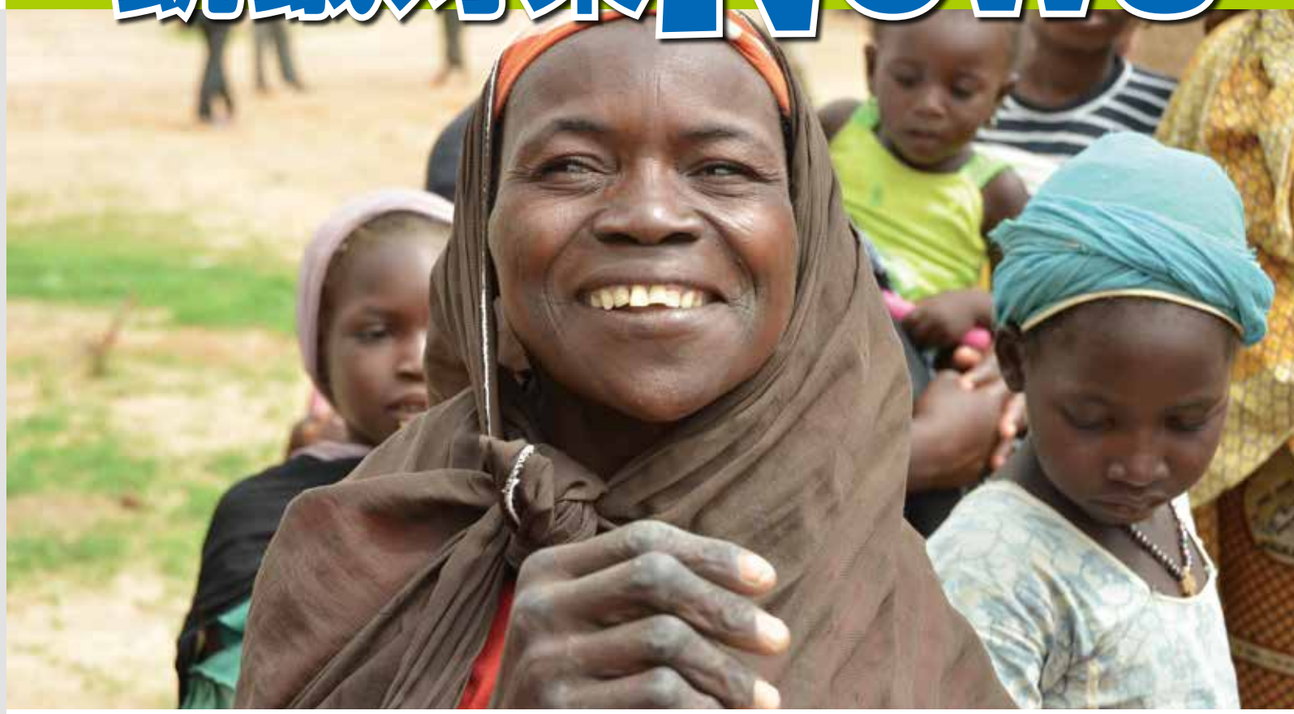
■発 行 者　岩橋竜介
■発 行 所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
いいね 大募集　Webサイトアドレス http://www.jifh.org/
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック https://www.facebook.com/hungerzero
■募金方法　※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウエブサイトで
身近に便利になりました
●郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
●他の金融機関からの自動振替●クレジット、デジタルコンビニ

大　阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東　京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル 517 号室
TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛　知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広　島　〒730-0036 広島市中区袋町4- 8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036　FAX (082)546-9037
沖　縄　〒901-0156 那覇市田原3-8-1 ユリ香ハウス 201号
TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540
東　北　〒980-0012 仙台市青葉区錦町1- 13- 6エマオ2階 E
TEL (022)217-4611　FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。

日本国際飢餓対策機構　2013 No.270　1

飢餓対策News



新しい年2013年を迎えました。昨年も、皆さまからの尊い募金や様々なご支援をいただき、JIFHの活動は支えられました。心から感謝いたします。

一昨年は、東北大震災の復興の活動に力を注いできました。多くの方々が募金やボランティア、そしてお祈りくださることによって、共に復興に携わってきましたが、その熱い思いは途切れることなく、昨年も形を変えながらも継続していきました。JIFHはこれからも東北の皆さまのことを忘れることなく、息の長いご支援を続けていきます。

一方、目を海外に向けますと、今まで以上に飢餓と貧困の問題は拡大し、複雑化しています。昨年は私自身も二度アフリカの支援活動地を訪問してきました。特に、西アフリカのニジェールは飢餓の問題が深刻化しており、対応が急がれるものでした。しかし、以前飢餓対策ニュースでも報告されていましたように、ニジェールで私たちが取り組んだのは、物資とお金を送るものではありませんでした。長年の経験と反省の中で、JIFHだけでなく他の援助団体も、物を与えるだけでは解決になるどころか、依存体質が生まれてしまい、本当の支援にはならないことを学んできました。

わたしから始める、世界が変わる

ニジェールでセミナーを通して地域のリーダーの方々と一緒に学んでいく中で、彼ら自身が改めて気付かされたことは、誰かが変わればまわりが変わって状況が好転するのではなく、まず自分が変わる必要があるのだということでした。当り前のことかもしれません。しかしこれはニジェールの方々だけではなく、私たちも同じなのだと、私自身も教えられ反省させられたのでした。問題が起こる時にまずは何が、又は誰が悪いのかを特定し、次にはそのことやその人を非難します。けれども私たちはうすうす気づいているのです。それだけでは何も変わらないし、生まれないことを。ニジェールのリーダーたちは、プライドを捨てて言いました。「私が一番先に変わらなければいけないんです」と。実は、単純な問題を複雑にしていたのは、自分ではないか、と教えられました。確かに、問題は大きいです。しかしまず自分から変わり、自分から何かを始める時に、確実に変わり始めていくのです。それが一人、また一人と加えられる時に、必ず世界は変えられると信じます。

活動地の人々が変わり始めました。今年は私たち日本にいる者や、豊かな国に生きる者が変わる番です。JIFHはそれを信じ、今年も最善を尽くします。どうぞ、昨年以上にご支援ください。「私から始める、世界が変わる」ハンガーゼロ･飢餓の撲滅を目指して一緒に進んで行きましょう。

日本国際飢餓対策機構　理事長　岩橋竜介

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

フィリピン台風 被災者緊急支援を開始
みなさまのご協力をおねがいします！

台風で壊れた沿岸部の家屋

行方不明者の捜索を見守る住民

12月4日にフィリピンを直撃した超大型台風24号ボーファによる死者は、12月16日現在1020人。被害は洪水と地滑りに見舞われた南部のミンダナオ島に集中しています。844人が行方不明ですが半数は台風直撃前に出向した漁船に乗っていたため絶望視されています。

この台風で620万人以上が被災し負傷者は2,600人を超えました。ミンダナオ島のダバオ周辺に上陸した時、風速67mを超える猛烈な風を伴い波の高さは15mに達した言われています。被害地域があまりにも広いために、現時点では、給水作業も行われていない状況です。

日本国際飢餓対策機構は、現地パートナーのハンズ・オブ・ラブ・フィリピン、韓国飢餓対策機構（KFHI）らと協力して飲料水、食糧などの配給を行いました。今後も地域の教会と協力しながら現地の必要に応えていきます。

緊急支援として、日本バプテスト連盟の協力による水フィルター570セットとパン・アキモトによるパンの缶詰約7,500缶を送りました。

＝避難所ともなる教会も倒壊、周辺住民に精神的ダメージ＝

フィリピン駐在員 酒井保（HOLPFI）から現地レポート

12日、再びニューバターン（New Bataan）を訪問。ダバオ（Davao）からは車で2時間半かかります。流れてきたココナッツの木により川がせき止められて洪水が発生。その濁流に多数の家が流されました。その流木の撤去作業とともに行方不明者の捜索も行われていました。

さらにアンダップ（Andap）地域を訪問しました。私が訪れた場所は、コミュニティがあったところで400人以上の人たちが山津波に流されて行方不明になったと言われています。避難できた人たちから話を伺うと、山津波があったときは、すでに強風によりココナッツが降り注ぎ、トタン板も吹き飛んでいたため、外に出るのは非常に危険な状態だったそうです。家を出たくても出ることができない状況にあったために、被害が拡大しました。

また多くの農産物が被害を受けています。特にバナナのプランテーションは壊滅的な打撃を受けています。この地域では、その仕事に従事している労働者が多いため、家と収入を同時に失った人も多くいると考えられます。

さらに、この地域内の４つのバランガイ（ニューバタアン、バングロッグ、ユニオン、モンカヨ）にそれぞれ建てられた教会を訪問しましたが、４つのうち３つの教会が全壊していました。本来避難所として期待される教会の建物が倒壊したことは、周辺住民の心にも、とても大きなダメージとなりました。ある牧師先生は山道を移動中に鉄砲水に流され、そのまま行方が分からなくなっています。

被災地に入って被害状況を確認する酒井スタッフ

今回の視察には現地との強いネットワークがある CAMACOP（Christian and Missionary Alliance Churches of Philippines)の協力のもとに訪問しました。

CAMACOPがネットワークを通じて支援物資（米、水、缶詰など１回の配布で１家族が4～5日食べていける量）の送付を開始していますが、情報が足りない上支援を行うための資金も不足しており、活発な支援活動が実施できない状況です。

支援が長期化するのは必至ですが、当面は緊急的な食料配布を続けていく必要があると思われます。皆さまのご支援どうぞよろしくお願いいたします。

●フィリピン台風被災者緊急支援は、郵便振替又はウエブサイトから。クレジットも利用可能です。

写真㊤ミンダナオ島のティボロ小学校での給食支援。同㊦ミンドロ島ではハンズオブラブ・フィリピン・酒井保スタッフとともに地元教会の皆さんからお話を聞く。（後列右端に佐多さん）

JIFHフィリピン活動地視察

ついに活動地を見ることができた

報告・鹿児島リバイバルチャーチ　牧師　佐多洋明

11月５日から13日までフィリピンに行かせて戴きました。実は30年近く前から飢餓対策に関心を持ち、様々な形で関わって参りました。

一つは、１週間に１日は家族で３食断食をして、その金額を飢餓対策の為に送らせて戴くということを25年程前から行っております。また、学校関係などで飢餓の授業や講話もさせて戴いてきました。しかし、そこでお話しする内容は現地での飢餓対策の報告や、資料によって学んだことが中心でした。そこで、是非一度は飢餓の現状を見て来たいと思っていました。そして、今回ついにその機会を得たのです。

マニラではJIFH海外駐在スタッフの酒井氏から説明を聞きました。ここでの数時間のオリエンテーションは私にとって素晴らしい学びの時となりました。現地の人々がやがて支援を必要としなくなるばかりでなく、さらに他の地域の人々を支援できるように、明確な計画がなされていました。またこの地域にはまだ字の読み書きができない人々もいて、その人たちは、自分の生年月日が分からないので、住民登録もされていない。さらに、将来的な夢や計画を持てないで、ただその日その日を生きておられるということも話されました。そこで具体的な活動として、まず識字教育を行っているとのこと。

さていよいよ明くる日ミンダナオ島のダバオに飛行機で移動し、そこからアポ山のふもとの町へ、車で数時間かけて登りました。翌日は近くのティボロ小学校での活動をつぶさに見せて戴きました。小学校にはJIFHの支援による給食施設があり、週２回の給食支援を行っていました。給食後は教会の方々がそれぞれのクラスに分かれてバイブルクラスを行い、聖書のお話しをしていました。

ミンドロ島での地域支援

その後マニラまで帰り、それから車とフェリーでミンドロ島に入りました。

ミンドロ島のサンアンドレスへは、急流を４～５人乗りの小さな渡し船で渡りました。ここでは、地域の教会が一致して、地域の発展のために協力していました。これは、コミュニティリーダー・トレーニングによることが大きいものと思います。またこの地域では、自立支援、農業支援がなされていました。主婦たちが現金収入を得る為に、石けんを作って出荷しているのと、豚を買う為に支援をし、その豚を増やして収入増を図るという試みもなされていました。また、ここでも給食支援が行われていました。

私達はサンアンドレスから川を何度も渡り、約１時間半かけてさらに奥地のシド村に行きました。この村はわら屋根に板壁の家、床下で鶏や豚を飼っていました。ここでは、JIFHの働きかけで小学校の分校が建てられ、子ども達の学びや定期的な識字教育が行われていました。また収入を得るために、ビーズで様々な物を作って売るように指導していました。

実は今回、教会の都合で、一人だけ先に帰ることを余儀なくされましたので、マニラでの橋の下での生活者やお墓に住みついておられる人々の様子を知ることができませんでした。それだけが少し心残りではありますが、有意義な時を過ごせましたことを感謝いたしております。

今回学んだことを踏まえ、学校等での飢餓の授業に生かしてまいりたいと思います。

里子は無事　ミンダナオ島では12月の大型台風の直撃で大きな被害が出ていますが、活動地が高地であったため子どもや家族に被害はありませんでした。

●フィリピンの人々の自立を助ける働きや子どもたちをぜひ応援してください。大阪事務所までご連絡ください。

※文中にでてくるミンドロ島でのビーズクラフトは、(株)キングダムビジネス☎072（940）6814で販売しています。

ケニアのスラムで暮らす ルーシー・デイジーちゃんの一日

小学校1年生

デイジーちゃんの家族、自転車タクシーのお父さんは朝早く仕事にでかけます。家の近くには野積みされたゴミの山、ここが子どもの遊びにもなっている

お肉が食べられる水曜日はみんなの一番の楽しみ

シープケア学校１年生のルーシー・デイジーちゃんは７人家族。お父さんはボダボダと呼ばれる自転車タクシーの運転手。朝６時から夜８時まで一生懸命働いていますが、収入は不安定です。

ルーシーちゃん一家が住んでいるのは、ケニア・ナイロビ市街地から15㎞東にあるソウェトと呼ばれるスラム地区の一角にある長屋です。地域のほとんどの家と同様、電気・水道の設備はありません。お母さんは、ジェリーカンと呼ばれるポリタンクを持って、毎日井戸水を買いに行きます。重たい水を持って何度も往復しなければならず、水運びは大変な重労働です。

食事は学校給食（JIFH支援）だけの日もあります

朝食は１杯の紅茶だけ

ルーシーちゃんは、朝６時半に起きます。朝食はミルク紅茶１杯のみで、それも週に３回程度。たまにカップケーキがつくこともありますが、それは、お父さんの稼ぎがよかった日だけです。ミルク紅茶も飲めない日は、学校で10時のおかゆが出るまで何も口に入れることができません。そんな時はおなかが空いて、なかなか授業に集中できません。

給食は午後１時から。干ばつで食料価格が高騰し、以前の２～３倍という高値が続いている中、日本国際飢餓対策機構を通じて日本の皆さんから送られる支援のおかげで、シープケア学校では、何とか学校給食を続けることができています。兄弟が多く、最も生活が苦しい家庭の子どもたちは、学校給食が１日の唯一の食事という場合も珍しくありません。発育期の子どもたちのことを考えて、給食は栄養価の高い豆とメイズの煮もの。大好きな主食のウガリと肉入りの煮ものが出る水曜日の給食を、みんな楽しみにしています。

３時10分に学校が終わり家に帰ると、ルーシーちゃんは宿題をします。家は６畳ぐらいの空間にベッド、テーブル、椅子がありとても狭いです。電気はなく室内は暗いので、窓際で床に膝をつき宿題をします。宿題が終わると、妹や近所の子どもたちと一緒に外で遊びます。かけっこをしたり、かくれんぼのような遊びをしたりします。工業地域から流れてくる汚染水で黒く濁った川とゴミ山がすぐ近くにあり、健康上決してよい環境とは言えません。

外から帰ると、タライに入れた井戸水でお母さんに体を洗ってもらいます。水は貴重なのでたくさんは使えません。また、浴室も長屋１軒（約10世帯・50人）にひとつだけですから、サッサと済ませなければなりません。

共同の浴室でお母さんに体を洗ってもらいます

子どもたち３人はベットの間で寝ます…

１週間を乗り切るための食物？

学校で給食が食べられる子どもたちを除いて、地域の人たちは、ほとんどが１日１食という生活を送っています。電気もガスもありませんから、灯油や木炭で調理するため、非常に時間が掛かります。夕食はたいてい主食のウガリと、スワヒリ語で「スクマ・ウィキ」と呼ばれているケールの炒め物です。スクマ・ウィキというのは、「１週間を何とか乗り切る」という意味です。苦しい生活を送っている人たちは、肉を食べたいと思いながら、安価で栄養価の高いケールで何とかその日その日を乗り切っているのです。ルーシーちゃんの家では、お父さんの帰宅を待って、午後８時半にみんなで夕飯を食べます。

電気がありませんから、夜は、ハリケンランプと呼ばれる灯油ランプで灯りをとりますが、とても暗いです。また、煤が出るため、長時間使用すると目の障害を起こすこともあります。

夕食後、テーブルや椅子を片付けて就寝の準備をします。お父さん、お母さん、赤ちゃんはベッドに、子どもたち３人は床にマットレスを敷いて寝ます。１日が終わり眠るのは、午後10時位です。

兄を支える地域の人々

ルーシーの５人兄弟の一番上のお兄さん、オッコは昨年末シープケア学校の８年生を終えて全国統一高校選抜入試を受け、成績優秀で全寮制の公立学校に入学を許可されました。しかし、全寮制の学校に入るためには、授業料に加えて、教科書や教材、制服、革靴、ベッド用シーツ、水汲み用のバケツ、石鹸などなど…たくさんのものを揃えて持っていかなくてはなりません。不安定なお父さんの稼ぎだけでは到底足りず、せっかくの入学をあきらめざるを得ないところでした。けれども学校の先生をはじめ地域の方々が、それぞれ１日１食がギリギリという厳しい生活の中から少しずつお金を出し合って、何とかお兄さんのオッコを送り出してくれました。

出発の前日、オッコは教会で、「ここに戻ってきて、みんなの生活状況を変える力になれるよう、一生懸命勉強します！」と皆にお礼を述べました。そして翌日、付添の先生と共に長距離夜行バスで新しい学校に向かったのです。

シープケア学校の教室でお友だちと

ウガリ

ウガリは、コーンミールやキャッサバなどの穀物の粉を湯で練って作ります。アフリカ伝統の食品で、ケニアなどアフリカ東部や南部で主食として広く食べられています。地域によって硬さや弾力、呼び方が異なります。

ケール

ケールは、地中海沿岸が原産でキャベツの原種に近く、温暖な気候であれば一年中栽培できて収穫量も多い。キャベツとは違い、結球しません。栄養に富み、ビタミンやミネラル類の含有量が多い。

里親さんからルーシーへ

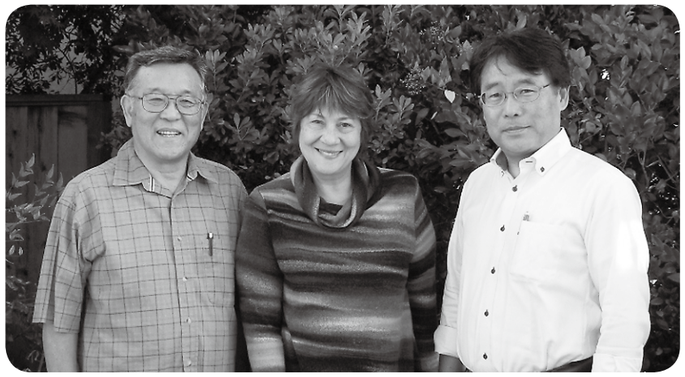
元気にしていますか？
私たち夫婦と7歳、3歳の子どもたちは、ルーシーの写真を部屋に飾って毎日見ているよ。そしてルーシーとルーシーの家族がいつも元気であるように祈っています。「今日はルーシーは何を食べたのかな？病気になっていないかな」とみんなで話しています。もし悲しいことやつらいことがあったら、私たちにお手紙を書いて教えてね。一緒に泣いて、一緒に考えて、一緒にお祈りするからね。（兵庫県）

子どもたちはサポーターを待っています！

●チャイルド・サポーターは、里子一人につき毎月 4,000 円。ウエブサイトからのお申し込みの場合は、クレジットカードもご利用になれます。資料請求は最終面から。大阪事務所　世界里親会 Tel.072(920)2225

米国からハンガーゼロ応援します！

報告・日本国際飢餓対策機構　特命大使　藤川武彦



写真左から米国在住の藤川特命大使、上原親善大使、田村啓発総主事

今年の4月から日本国際飢餓対策機構の働きを推進するアメリカ特命大使の任を頂きました。数年前から世界の飢餓に苦しむ幼い子ども達がいかに多いかを飢餓対策ニュースで読み、私にも何かが出来ないかと祈っておりました。

カリフォルニアでは既に日系人教会から信徒の皆さんのサポートを頂いておりましたが、直接的なプロモーションは行われていませんでした。少しでも多くの、アメリカに住む日本語を解する皆さんに、飢餓と貧困の現実を理解していただいてサポートが出来れば、と10月24日から30日までの１週間、日本国際飢餓対策機構の親善大使でゴスペルシンガーの上原令子さんと啓発総主事の田村治郎氏にサンフランシスコ地区に来て頂きました。

米国教会でコンサートに出演中の上原親善大使

サンロレンゾ・ホーリネス教会、ペニンスラ・フリーメソジスト教会、サンタクララ・ホーリネス教会、ウオールナットクリーク教会の４ヵ所で合計６回のコンサートと日本国際飢餓対策機構の働きの説明が行われました。総数400人近くの皆さんが来て下さいました。

始めての飢餓対策支援企画でしたが、多くの皆さんが協力をして下さりまた飢餓に関する知識と理解が与えられたことから、毎年このようなプロモーションが出来ればと願っています。

支援への思いさらに！

私と上原令子さんは長い間の友ですが、今回は国際飢餓の親善大使の働きとして賛美を通してアピールして下さり、多くの方々に感動を与えることができて、とても恵まれたコンサートでした。又、田村総主事はビデオやパンフレットを用いてアフリカ諸国での飢餓の現状を詳しくお話しくださいました。今まで私たちが知らなかった飢餓で苦しむ国々の子ども達が、私たちと同じように食べることができ、生きる権利や教育を受ける機会が与えられるように支援をする事が出来ればと改めて祈らされました。

アメリカ人の大人の60%は肥満。しかし世界では８人に１人が慢性的な栄養不足に苦しんでいる

コンサートで世界の飢餓の現実を語る田村啓発総主事

との驚くべき統計が出ています。

今まで毎日好きな食べ物を自由に食して来た生活から、現在は同じ食するにも感謝して、ハンガーゼロの世界を目指してアメリカに住む多くの日系人からも支援が得られるよう、働きを推進出来ればと願っています。

カリフォルニア州オークランド在住

藤川武彦

●ハンガーゼロ・サポーターのお申し込みは、最終頁の申込み欄又はウエブサイトから。クレジットも利用可能です。

子ども保養プロジェクトのひとコマ

ふくしまHOPEプロジェクト　コーディネーター　布山真理子（日本同盟基督教団 巡回教師）

・・子どもを思いっきり遊ばせてあげたい・・

2011年３月14日の大きな事故から、１年９ヵ月がたちました。今もなお福島では、様々な感情の中で生活を送っています。震災から１ヵ月後、新聞記事により福島の線量が高いと分かった時、多くの場所でパニックが起こりました。ある家族は県外に母子避難をし、ある家族は毎週末県外に出ていって子どもを遊ばせ、野菜を買って帰ってきました。また「福島の子どもたちの尿からセシウムが検出された」などと、福島の人たちを不安にさせる情報が飛び交いました。さらに事態は深刻化し、母子避難していた家族の離婚が増えてきたのです。家庭が壊れるくらいなら、と福島に帰ってくる家族が増えました。

外で自由に遊べなくなった子どもたちはストレスを抱え、笑わなくなってしまったり、また家庭内で暴力をふるう子も出てきました。外で遊べないせいか、体力が落ちる子どもも増えました。

11月のつま恋キャンプ

そのような状況の中、私たちは教会にできることは何だろうと考えるようになり、子ども保養プロジェクトを実施することとなったのです。福島市の教会から始まった子ども保養プロジェクトは、市のネットワークの基礎となり、次第に県のネットワークである福島キリスト教連絡会（FCC）となっていきました。こうして「福島県キリスト教子ども保養プロジェクト」（通称ふくしまHOPEプロジェクト）が設立されました。

希望がもてましたとの声も

このプロジェクトには大きく分けて３つの働きがあります。

１つ目は、各支援団体及びキリスト教会と協力して、子ども保養キャンプを企画、開催すること。この夏に２回、11月に２回１泊２日から２泊３日の短期保養キャンプを実施することができました。

２つ目は、ホームステイを希望する家族のために、保養先の斡旋や情報提供を行うこと。

この夏、青森クリスチャンセンターに９家族33名を受け入れ、２泊３日から２週間の保養を実施しました。

３つ目は、設立の趣旨実現のために幅広く内外の協力を求める。

短期キャンプに参加された親御さんからは「福島では子どもたちが外で遊んでいると『中に入ってきなさい』と怒ってしまいます。でも、ここでは何の心配もなく外で遊ばせることができます。本当に感謝です」、また青森保養に参加された親御さんからは、「子どもには安全な自然に触れてもらいたいと思っているので、最高の場所でした」「受け入れてくれるところがあるだけで希望が持てました。気持ちが前向きになれました。これからもぜひ続けてほしいです」という声を聞きました。

福島の方々は今も放射線量の高い中でストレスを抱えながら、生活を続けています。このように保養に出かけて思いっきり遊ぶことが福島の子どもたちには必要です。また、不安を口にし、語り合う場所が親御さんには必要なのです。ふくしまHOPEプロジェクトは、５年間この働きを続けることを決めました。この働きを継続していくには人的また資金的な必要があります。これからは医療従事者と協力し、保養キャンプの効果を調べることも必要です。

すべての必要が満たされて、継続的に実施していくことができますように、ご支援ください。

●東日本緊急支援募金にご協力を　郵便振替 00170-9-68590 日本国際飢餓対策機構　記入欄に「東北地震」と明記